

# デーモステネース再讀

— その『平和論』をめぐる断想 —

西澤龍生

## 1

社会主義を護持するためには、社会主義をかなぐり棄てねばならない。ゴルバチョフ氏の政治的アクロバットがめでたく事を収めうるかは、神のみぞ知るところだけれども、自己撞着する政治家のディアレクティブに目を奪はれるにつれ、おのづと脳裏に去来するのはデーモステネースのことである。少年老い易く、はや漂渺たる雲煙の彼方の思ひ出に過ぎぬにせよ、若き日少なくとも血を湧かせつつギリシア文字を覚束なくも辿ったあの辯論家である<sup>1)</sup>、非力、当時扱ひえたのは、量的に多分最短篇の《περὶ τῆς εἰρήνης》でしかなかったとはいへ、戦ふ辯論家の16を数へる政論のうち『平和論』として伝へられるこの一篇が、実践の曲り角で不図見せた或る隙間、歴史の断層として依然関心を唆るものであることに変わりはない。追想的な寸感を記してみよう。

## 2

言ふまでもなく『平和論』とは、一貫する反フィリッポス政略の旗手デーモステネースがマケドニアとの和平を説いた、この雄辯家にとっては文字通り異色のロゴスだ。だから古来、果してこれが聴衆の面前で語られたものか否かについては疑問がもたれてゐる<sup>2)</sup>。たとひ演説の服案として一應したためられたことは認めるとしてもだ。ただし論旨は和平の為の和平ではない。他日を期する隠忍への論しであって、口調はあくまで重く苦渋に満ちる。そこに誤讀のある筈はない。が、にも拘らず、これを偽作としたくなるほど、それほど古人の直覚が捉へた違和は烈しいものがあつたのではないであらうか。今一度古き疑惑に立ち戻って、デーモステネースにおける実践の逆説を吟味してみるのも一興であらう。

前348年夏、北方の要衝オリュントスの失陥は、黒海からアテーナイへの糧道を扼するところが、敵<sup>マケドニア</sup>の手中に陥ったことを意味するがゆゑに、またかけがへなきこの同盟國の徹底的な破壊と根絶のゆゑに、今更のごとくアテーナイ市民を憤激の淵に突き落した。それはよもやと多寡を括ったことへの痛恨であり、事の進展の意外な早さへの狼狽を含むものであったから、ヘルラスの大同團結を懇へる使節たちが都市<sup>ポリス</sup>々々に急派されたことは当然の反應だけれど、それが後手々々だったことは詮方もない。結局、笛吹けど踊らず、ここにアテーナイは政策の大転換を迫られて、デーモステネースも含め、平和締結のための使節が敵都ペルラへと遣はされるのが前346年春、交渉の曲折は省略するが、ともあれ漸く成れる所謂「フィロクラテースの和約」が民会でも批推されて、これを伝える遣使がアテーナイを離れた頃、既にあらうことか、フィリッポス二世の軍はテルモピュライを通過して中部ギリシアの関門フォーキスを降してしまつてゐた。蓋しデルフォイの神殿並びに神託所を管理する隣保同盟<sup>アンフィクチュオニア</sup>の勢力分布をめぐり主としてテーバイとフォーキスの間でここ10年繰り展げられてゐた神聖戦争を、ヘルラス内部への介入の恰好の口実としたものであったが、フォーキス蹂躪のことを報じたフィリッポスの書簡<sup>くだん</sup>が、件の和約においてフォーキス問題に関しての誤解はなかったと強辯するばかりか、却てアテーナイの敵意を非難したのは、混乱に拍車をかけるものだったに違ひない。ましてや、其の後行なはれたアンフィクチュオニア會議の決定が、フォーキスへの制裁としてその投票権を奪つてフィリッポスに与へること、その年にデルフォイで開催のピューティア祭の主催者が、フォーキスに加担のドーリア人に代り、これまたフィリッポスとされることなどを議決したと伝えられれば、これがアテーナイを刺戟して、スパルタとともに、祭典への委員派遣の拒否となるのは当然の措置であらう。ヘルラスの神聖なる同盟に北狄マケドニアが堂々と袂を列ねるばかりか、ピューティア競技をもとりしきるとあっては、その南下膨脹に錦の御旗が授けられたことになるではないか。あらためて議決の批准を迫った會議の使節に、民会が更に硬化した態度で臨んだのは言ふまでもないが、かかる態度がむしろ敵に次なる口実を与へる危険を説いて、ここは隱忍して他日を期すべきことを詢々と懇へたのが、

実に『平和論』にこそほかならなかつたのである<sup>3)</sup>。

#### 4

デーモステネース<sup>レゲン</sup>伝説の形成に関し、前世紀來、片やシェーファー<sup>4)</sup>、ブラス<sup>5)</sup>等に極まる崇高な自由の戦士への古典主義的<sup>しやうぎ</sup>莊嚴の流があるのに対し、片や「苔むせる Advokatenrepublik」の彼方に洋々たるヘレンス<sup>イコノクラスム</sup>スをさし望むドロイゼン<sup>6)</sup>の情容赦ない偶像破壊があることは、容易に想像のつくところであるが、引き裂かれたこの乖離の空間を埋める第三の立場としてヴェルナー・イエーガー (Werner Jaeger) の著作<sup>7)</sup>が、政治家デーモステネースの全体像にすぐれた肉迫の範型を示してくれてゐることは、結論しても差し支へないであらう。単なる伝記でもなく、さりとて歴史記述そのものでもないこの省察が、従つて精神と現実の二律背反を飛躍的に媒介する決意性のこの主体の行動の軌跡を解析したものであることは、それをすぐれて実践哲学的な考察たらしめてゐるのであるが、ただ対立を止揚する媒介項としての行為そのものが危機的状况における生ける有機的統一の成就として或る意味で実体化されることは、却て内在への退却と目される面もありはしないか。飛躍も時には逃避となりはしないか。問題は、むしろ、彼の行為と、正にそれすら超える世界との一層本質的な乖離、しかもそれと知りつつ敢て持場を彼が離れなかつたといふことであらう。解決自体によって本質的な対立の一方の項を抜き取つてしまつてはならなかつたわけである。可能性の限界を百も承知で身を賭し、且つ同胞に身を賭さしめんとする人の、<sup>デュケ</sup>運命に身を委ねた一種の安心と立命を、我々は彼のロゴイに聞きとらなくてはならないのではないだらうか。政治の修羅をも祭事の舞台と観じて無心の演技に己れを献げる人の一所懸命を感得しなくてはならぬのではないだらうか。後年カイローネイアの決戦 (前338年) にすべて<sup>まつりごと</sup>ことをはつて無漸なその運命<sup>デュケ</sup>を更に8年を経て振り返つた『栄冠論』の、人事をつくした誇らかさにはまだ至らぬにせよ、『平和論』には、実践が実践自身の闇黒に蔽ひ包まれるといった限定的な局面に曝されつつ、しかもなほ且つ、否、だからこそ却て、無明の彼方への祈りにも似たものが秘められてゐると思へる。及び難いとはいへ、問題の所在を暗示する二三の鍵をここでは模索してみることにしよう。

が、その前に『平和論』の論旨につき大略述べておく必要があるであらう。むろん万遍なくそれをするのは紙幅がこれを許さないから、必要の範囲内に偏ることはやむをえないが、簡単な見取図を描くとすれば、先づ甲論乙駁してゐるうちに情勢からいよいよ見離されてゆくことの愚かしい所以(0-3)、次いで憚りながら提案をなすに当って、提案者が先見の明を示した過去三度の実績の想起(4-12) — これについては後段であらためて論ずることとする — そこで漸く本論(13-23)に入つては、例令誇るべく、また信ずべきそれにあらずといへ、既に成れる和平は敢て破らざるやう心すべきこと、アンフィクチュオニアの面々をして、言ってみれば対アテーナイ十字軍を催せしめる口実だけは与へてはならぬといふことが慫へられて、そこでは、かかる場合以外保身のため各ポリスとも容易に腰を上げぬことを見極めた上、しかもテーバイ、マケドニアをはじめ各地、各都市との個々の争点で連動の危険性ある諸案件につき一つ一つ精細に検討してゆく。状況の八重葎むぐらの中で縫もつれを丹念にほぐしてゆく趣があるが、ここに結論(24-25)となつて、以上は徒らに恐怖を煽らうとて言ったのではなく「我らは己が品位を貶すやうな振舞があつてはならぬし、戦争も避けるべきであつて」(24)、従つて今は潔くテーバイをしてオロポスを領有せしめるに任せようと説く<sup>8)</sup>。その理由は何ぞと問はれるならば、「我らのゆめ戦はざるやう」(*ἵνα μὴ πολεμώμεν*)と言ふほかなしと明快に断じて、その上で、これまでフィリッポスに対し譲りに譲つて来たのは、争ひよりは平安の方が得策だからで「我ら自身の死活の問題に関し各々に対して一つ一つかくの如く取引をしておきながら、今にいたつてデルフォイの影にかくれた彼ら凡てと干才を交へるときは、そもそも愚の骨頂にして言語道断」(25)と締めくくるのである。

非常事態を前にしての — 批評などではない — Realpolitikerの正に政治指導の実際を髣髴とさせる論調であるが、特に注目したいのは、たしかにその指導の軌跡は、逆流の渦巻く中、敢て取舵いっばいに大きく弧を描いたことは誰の目にもかくれなき事実であつたにも拘らず、転進につきデーモステネースが一言半句釈明ととれる言辞を弄してゐないことである。たしかに刻々に変化する情勢に随つて事実を追ひはする。でも、時運とき

に非なるは、ただ状況の然らしむるところ、しかも状況を先取しえざりし不明は、むしろ政敵たちのものである<sup>9)</sup>。そして彼は何の悪びれるところもなく、あらためて過去が<sup>あか</sup>證してくれる己が先見の実績を聴衆の前に信用の担保として三つばかり差し出してみせる。それについて記せば下の通りである。

- (1) フィリッポスの策動によるエウボイアの内紛に捲き込まれ<sup>10)</sup> 牽制されてゐるうちにオリュントス救援がおくれ、肝腎のこの橋頭堡を失ふといふ苦杯を嘗めたが、あのとき敵の陽動作戦に乗せられぬやう断乎反対した自分は「もう少しであの連中から八つ裂きにされるところだった。」
- (2) フィリッポスの宮廷でも人気を博した役者<sup>ヒュボクリテース</sup>ネオプトレモス<sup>11)</sup>は、オリュントス失陥後、同業のアリストデーモスとともに、フィリッポスの<sup>フィリア</sup>好意を伝へた男であるが、ディオニューソス劇の奉納でなら別にどうといふこともないこの人物がかかる祭儀への関与ゆゑの神聖不可侵といふ職業上の安全保障を悪用して無事帰國の上、資産を換金して<sup>くだん</sup>件の王の下へと逐電したのは、世間周知で、この男がフィリッポスのためアテーナイの民会でいろいろ工作したとき、別に私怨や三百代言ゆゑにではなしに敢て待ったをかけて辯じたのは私であった。それが社稷の安寧に関はることではなければ、私に対して、あんなにも同胞諸君が敵意満々、聞く耳もたれぬことはなかったらうに。でも、自分の振舞が為にするものではなかったことは、その後の経過が明らかにしてくれた通りである。
- (3) フィリッポスより平和の宣誓を受けて使節達が帰國したとき、或る者たち — つまりアイキネースの一味 — は、フィリッポスの弄する様々な甘言を鵜呑みにして、謬見と錯誤に満ちた報告を行なったものであるが、「かかる希望のまやかしこそは、深慮と公正に見事反して、フォークスを抛棄へと導く所以となった。さうした迷妄に対し、自分はその「どれ一つにも欺かれもしなければ、それらを黙殺するものでもない」ことがわかっていただけであらう。

而してかかる先見を示しえた原因として彼は次の二つ以外にはないと述べる。即ち一つは僥倖（*εὐτυχία*）であり、今ひとつは、私心なく（*προικία*）判断し考量してゐることなのだ。だから、どんな事態にならうと、よりよ

き途が見えてくるので、<sup>てんびん</sup>天秤にかけるやうなことをすると、分別を奪はれて、正しく健全な判断が出来なくなってしまうのとは大違ひだと喝破するわけである。いはば原点に立ち還って己がぎりぎり最後の一線に開きなほった恰好であるが、己れの信を問ふかかる姿勢に政治家の如何なる心事を我々は忖度することが出来るのであろうか。

## 6

「事態かくのごとき中において、<sup>にもかかはらず</sup>(*οὐ μὴν ἀλλὰ καίπερ*) 私は思ふ、しかもまた己れを信じて立ち上ったのだ。(καὶ πεπεικῶς ἐμαυτὸν ἀνέστηκα)……」(3)

ここに「思ふ」とは、アテーナイ人諸君にして、騒ぎを鎮め聞く耳持つてさへ下さるならば、事態を改善して失ったものを救ひ出すことも出来るであらうと思ふといふ意味である。

冒頭近くに吐露されるこの *οὐ μὴν ἀλλὰ καίπερ* に <sup>かなめ</sup>ロゴスの要としてのキーワードを読み込むことは可能だらうか。凡ゆる希望が崩壊し、可能性が次々影を没しゆく中で、敢て希望の可能を打ち出さうとする政治家の意志の凝集をそこに見るのは誤りだらうか。

縷言するが、デーモステネースにおける眼目は、あくまで祖國の孤立を避けることであった。出来得べくんば、むしろフィリッポスを孤立に追ひ込んで、デルフォイに象徴される聖空間を本来のヘルラス世界につなぎとめることであった。そのための同盟 (*συνμαχία*) が語られてゐるのであるが、その中味を少しく検討すれば、相互の援兵は、結局、第三國からの侵寇に対しての助け合ひで、攻撃部隊としては、いづれとも結ぶことがない。(16) いづれの國も己れのため安全 (*σῶς*) を望むにしても、他國の制覇までは真っ平だ (17) といふのが本音なのだとわかる。だから、それは正確には *ἐπιμαχία* (防禦同盟) と云ふべきところである<sup>12)</sup>。攻撃に繰り出す一元的統合ではなく、あくまで受けて立つためにスクラムを組む多面的連合といふことになるからである。それをしも敢て *συνμαχία* と称するとき、論者自身は己れの<sup>限界</sup>を内心では自覚してゐなかつたであらうか。かかる状況の下、しかもカイローネイアの民族的結束にまで盛り上げ得たのは、辯論家の正に超人的な力量の證明ではあつたとしても、あくまでそれ

は結果論で、ここ『平和論』の時点における憂國者の心境は、正に虚無の深淵を覗き込むそれであったのではないだろうか。

## 7

《Tout est dit, et l'on vient trop tard.》(La Bruyère) ギリシア古典の恐らくは極北とも云ふべき大辯論家の作品につき、おくれて来た我々がいったし新たな提言を行なふなど望みうべくもないところであるが、然もなほ且つドイツ・アカデミスムスの最高峯、かのブラス(F. Blass)の大著(《Die attische Beredsamkeit》)を向かふにまはし、新境地を開かんとする試行もなくはなかつた。ロンネ(G. Ronnet) 女史の《Étude sur le style de Démosthène dans les discours politiques》がそれで、1951年の上梓であるから、それ自体些か時代が過ぎてしまったと言へなくもないのであるが、しかしその方向でのこのノルマリエンヌの達成を凌ぐものには以後寡聞にしてお目にかからなかつたやうである。むろん《par l'histoire du style, faire l'histoire de l'homme》をめざすその素志が、些か図式性の過剰ゆゑに、十二分に果されたとはいへ、拙い書評<sup>13)</sup>を嘗て試みた折にも、評価しえなかつたが、それでもいくつか興味ある成果には注意を喚起させられた。各ロゴイに於ける「陰喩」(Metaphores)の出現頻度をパラグラフに対する百分比を以て示さうとする努力など、面白い着眼と思へたが、個々の方法論的疑義にも拘らず、辯論を通して辿られるこの人の心の軌跡が、『第一フィリッピカ』(前351年)を中心とする昂揚と希望の時期から『第一オリュントス論』の冷静な控へ目を経て、再び『第二、並びに第三オリュントス論』の叱咤となり、前346年『平和論』以後は、又もや現実の直視に自己を抑へて、最後は『<sup>クテンフオン</sup>栄冠論』(前330年)における人事をつくした誇らかさ(un orgueil serein)ゆゑの多彩絢爛たる奔騰となるといった具合に、大筋ではかなり鮮明な起伏を描くことを確認しえたのは、少なくともそれなりの収穫であつた。小論の場合に限れば、圧倒的な<sup>レアリテ</sup>現実の変転を前に、既に<sup>メタフ</sup>陰喩を紡ぎ出すゆとりも消えた一つの表現上のエア・ポケットが指摘されるわけであるが、敗北を倫理的榮光に転ずる凍として冒しがたい『<sup>クテンフオン</sup>栄冠論』の「悲劇的カタルシス」へと結晶する以前の、言ってみれば無明との格闘のその記録から我々ほどのやうな英雄

像を浮かび上らせることとなるのであろうか。

この際、さきに、己が信を問ふため先見の実績として彼が三つの事例を、自筆の身上調査よろしく、聴衆の前に披瀝した事実を想起したい。注目したいのは、その三つのうち二つまでが、それぞれネオプトレモス並びにアイスキネースといふ<sup>ヒュボクリテース</sup>役者、乃至は役者あがり<sup>トリタゴニステース</sup>を槍玉にあげてゐることである。— 殊にもアイスキネースに関しては、様々なロゴイで繰り返し<sup>トリタゴニステース</sup>端役とときおろして、むしろ喜劇にふさはしくあしらつてゐる。— 孰れも利を以て傭はれた喜劇の<sup>ア</sup>べてん師(ἀλαξών)として、この場合も、扱はれてゐるわけであるが<sup>14)</sup>、恰もそれをあてこするやうに、すぐあとの、己が私心のなさを辯じて、分別なき者<sup>そし、くだり</sup>を譏る條で、この者共が分別を奪はれたのは、<sup>てんひん</sup>天秤に銀<sup>かね</sup>を載せるやうなことをするからだといったかたちで、わざわざ<sup>ἀργύριον</sup>なる語が打ち出されるのである。因みに分別とは正しくして健全なる判断で、<sup>ὀριῶς</sup>なる語が顔を出すのは、《maladie》、《mort》など<sup>15)</sup>と並んで、乏しいながらも<sup>メタフ</sup>ない隠喩の水位が肉体の生死にまつはる最も原始的な底辺にまで下降したといふことであらう。

が、それはさて置き、<sup>メタフ</sup>隠喩を弄ぶ「あそび」の余地も目立って奪はれるほど<sup>はま</sup>生の現実と待たなしに直面するとき、繪空事の世界を虚構する俳優(ὀποκριτής)稼業が、いきほひ負のイメージを以て語られる傾向が強まることは想像に難くないのであるが、『平和論』におけるデーモステネースは専ら否定的にのみ役者なるものを思ひ描いてゐたのであろうか。ましてやそれら兩名はまやかしであるだけにとどまらぬ。敵の手先であり、大衆の人気に乗じて國論を誤らせようとする者共である。しかもそれを知った上で、これを裏から操り、總じてデルフォイなど祭典における上演を奇貨として用ゐようとするフィリッポスは老獪極まりない。敵視は当然であらう。

ただ、ここに一つ見落してはならぬことがあるのだ。それは己れに先見が恵まれた因由として、如上の何ものにも目を曇らされることなき私心のなさと並んで、先づ僥倖(εὐτυχία)が挙げられてゐたことである。これは何を意味するのであろうか。それは、政治家が政策の実現に最善をつくしたとしても、なほ且つ人間の力を超える何かしらがあるといふことである。また、あるといふ自覚である。それは必ずしも消極的な宿命論につながるものではなく、神が、たとへば、先見を恵まれた、好機とも稱すべき

能動的なものなのであるが<sup>16)</sup>、それにしても人間界を超えた次元ではある。その意味では、この世は神の演出し給ふ劇、人間はその振附けのままに演ずる俳優であった。敵の操るままに動くいかさまの端役どもを罵倒しつつ、自らは運命の命ずるまま虚心に舞台をつとめ上げようとする。デーモステネースにおける  $\dot{\upsilon}\rho\acute{o}\kappa\rho\iota\tau\acute{\eta}\varsigma$  は、『平和論』においても、かかる両義性に貫かれてゐたのではないだらうか<sup>17)</sup>。

可能性の限界を自覚しつつ、 $\dot{\iota}\mu\acute{o}\varsigma$  拘らず、持場にあくまで踏みとどまってこの可能性に賭ける心事には、恐らくかうした運命観の裏づけがあったに違ひないのだ。

## 註

- 1) 1952年「デモステネースの『平和論』」と題して京都大学文学部(旧制)に提出した卒業論文(審査教官、原随園、井上智勇、前川貞次郎、田中美知太郎)。
- 2) Dionysios Halicarnessensis, Ad Ammaeum, I. c. 10. ディオニュシオス自身はこのロゴスの Echtheit については些かも疑つてゐない。
- 3) 拙稿「所謂前346年の  $\text{Κοινὴ εἰρήνη}$  とデーモステネースの『平和論』」(東京教育大学文学部紀要『史学研究』1955年)参照。
- 4) Arnold Schaefer, Demosthenes und seine Zeit, 3 Bde., 1887.
- 5) Friedrich Blass, Die attische Beredsamkeit, 1893.
- 6) Johann G. Droysen, Geschichte des Hellenismus, Bd. I. Geschichte des Alexanders des Großen, 1836.
- 7) Werner Jaeger, Demosthenes, der Staatsmann und sein Werden, Berlin 1939. —, Paideia, Bd. III, Berlin 1947.
- 8) オロポスはアッティカの、ボイオーティアとの國境に程近いところに位置する。だから、その領有をめぐる紛争が発生したとしてもテーバイとアテーナイの間のことに限られる。その結果に関してデーモステネースは危惧してゐない。
- 9) アイスキネースを筆頭とする対マケドニア弱腰、乃至屈從派の辯論家たちを指すが、その一方で、この年フィリップposに長大の書簡を呈して、この國王を「ヘーラクレースの後裔」と持ち上げ、來たるべきヘルラスの和解に当りこの新興の君主に望を囑するといった迎動的な言辞を弄した文弱のイソクラテースなどもデーモステネースにとっては鼻持ちならぬ存在であつたであらう。
- 10) エレトリアの僭主プルータルコス(Plutarchos)は親アテーナイ派であつたが、フィリップposを後楯としたマケドニア派メネストラトスの猖獗に手を焼きアテーナイに救援を仰いだ。アテーナイは、デーモステネースの反論を押し切つて、フォキオンを派遣し、ことが紛糾するうち、本命のオリュントスで長蛇を逸することとなつた。古註によれば、プルータルコスは、恩知らずにも、アテーナイ軍の一部

を捕へ、50タラントンの身代金を強請りとった。そのことにもデーモステネースは触れて、同胞の反省を促すのである。

- 11) Plutarchus, *Moralia* 844F にはデーモステネースがこの人から演説術の手ほどきを受けたとする説が見えるが疑問視される。
- 12) cf. Hans Schaefer, *Staatsform und Politik*, 1932.
- 13) 『西洋古典学研究』V. (日本西洋古典学会) 1957年, 所収.
- 14) 川島重成『西洋古典文学における内在と超越——ホメロスからパウロまで——』新地書房, 1986, 194頁参照.
- 15) これらは前346年以降の一連の沈鬱なるロゴイの中からロンネ女史の拾ひ上げるものである。
- 16) 川島, 前掲書, 182頁以下参照.
- 17) cf. Georges Balandier, *Le pouvoir sur scènes*, 1980 (邦訳, 渡辺公三訳『舞台の上の権力——政治のドラマトゥルギー——』平凡社1982)これは狭い意味での政治 *la politique* ではなく, <政治的なもの = *le politique*> へと領域をひろげて政治の動態分析を志す政治人類学の新しい試みである。特に, 「演劇のパラダイム」への着目により遂行されるその作業は, 社会のさまざまなレベルに拡散された権力関係に照明を当て, 社会の常態としての政治を明らかにしようとするものであって, 政治人類学のいはば「余剰の部分」を埋めるものと評価される。辯論家・政治家デーモステネースの解明において, このような方向が新しい領域を指し示してくれるものであることは言ふまでもない。ただし今後の問題である。